

戒を持つ比丘淨き行を修ひて現の奇しき験力を得る

縁 第二十六

大皇后天皇の代に、百濟禪師有り。名けて多羅と曰ふ。常に高市郡の部内の法器山寺に住み、淨き行を勤修ふ。病を看ること第一にして、応に死なむ人も験を蒙りて更蘇る。病者を呪するごとに奇異しきこと有り。錫杖を取りて坂を上る時に、錫杖を錫杖の於に立てて、互に二の物を用て仆れず鑿の如くして樹つ。天皇尊重びて常に供養したまふ。諸人帰り仰ぎて恒に恭敬ふ。斯れすなはち修行の功は遠く芳き名を流へ、慈悲の徳は長に美き譽を存す。

邪見仮名の沙弥塔の木を斫焼きて悪しき報を得る縁

第二十七

石川沙弥は、自度にして名無し。其の俗姓もまた詳ならず。号けて石川沙弥と名ふ所以は、其の婦の河内国石川郡の人なるを以ちてなり。其れ容を沙

彌に仮るといへども、心を賊盜に繋く。或るは許りて塔を造ると称ひて人の財物を乞斂め、退りて其の婦と雑の物を置きて噉ふ。或るは摂津国嶋下郡の春米寺に住み、塔の柱を斫焼く。法を汚し人を詐ること、斯の甚しきに過ぎたるはなし。終に嶋下郡の味木里に到り、忽に病氣を得、声を挙げ叫びて言はく「熱きかな。熱きかな」といひ、地を踊離ること一二尺ばかりなり。衆人集り見て、或るいは問ひて曰はく「何故ぞ此くの如き」といふ。叫び答へて云はく「地獄の火来りて我が身を焼く。苦を受くること此くの如きなり。故に問ふべからず」といふ。即日に命終る。烏呼哀なるかな、罪の報空しからず。何ぞ、慎まざらむ。涅槃經に云はく「もし見有る人善を修行はば、名天人に見れ、悪を修行はば、名地獄に見れむ。何を以ちての故に。定めて報を受くるが故なり」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

孔雀王の呪法を修持ちて異しき験力を得て現に仙と作

り天に飛ぶ縁 第二十八

役優婆塞は、賀茂役公、今の高賀茂朝臣といふ者なり。大和国葛木上郡

第二十六縁 持戒の奇蹟を述べる。

一「持戒比丘」(四分律行事鈔・下ノ二)。本書で日本を舞台とした説話には比丘が登場するのは、本説話以外には下巻二十四縁のみ。下巻二十四縁では諸比丘は「六巻抄」(四分律行事鈔)を読んでいる。戒にかかわる。

二「淨行」は、戒を守って生活すること。不淫戒を守ること限定されない。

三持統天皇。

四未詳。本説話以外に所伝をみない。百濟出身の寺工に太良未太がいる(書紀・崇峻天皇元年条)が、「太良」も本説話の「多羅」も同じ語であろう。地名か。

五奈良県高市郡高取町の観音院か(改証)。

六阿婆羅抄・九十五・多羅菩薩の条に、「多羅」の語を、眼、瞋、度、救、の意とする。本説話の記述には、その解に合致する部分がある。七手に持った錫杖の上にもう一本の錫杖を立てる。一種の曲芸。

八底本訓釈「(ハ)大不礼須」。

九底本訓釈「(ハ)乃未」。

一〇底本訓釈「(ハ)立也」。

第二十七縁 今昔物語集・二十ノ三十八に書承。

二よこしまな考えをもつこと。仏を信ぜず、因果の理を信じない。

三名のみで実体の無いこと。瑜伽師地論九十八に「仮名出家の例がみえる」。

三底本訓釈「(ハ)左支」。

四未詳。本説話以外に所伝をみない。

五大阪府南河内郡、羽曳野市、富田林市あたり。

六底本訓釈「(ハ)音力今反」。

七大阪府美木市に所在する徳積庵寺か。

八ここに述べられた悪行は、大薩婆尼乾子所説經・四に第一の根本重罪として「破壊塔寺、焚燒經像、或取仏物法物僧物、若教人作見作助喜」とあるのに一致する。この文は、諸経要集十惡部・邪見縁に引用されている。「邪見」の具体相とされている。

九未詳。

一〇底本訓釈「(ハ)止奈加留」は誤写を含むか。

一一大般涅槃經・師子吼菩薩品。

一二天道と人道と。

第二十八縁 三寶・法・一、扶桑略記・文武天皇三年(六九)五月二十四日条に引用。三寶・法より今昔物語集十一ノ三に書承。

三孔雀王経の呪をもちいておこなう修法。いうところの孔雀王経は、後代さかんにおこなわれた不空訳や義浄訳ではなく、役優婆塞の時代では、僧伽婆羅訳、帛尸黎蜜多羅訳、鳩摩羅什訳、のどれか(改証)。

四統紀・文武天皇三年五月二十四日条には「役君小角」とみえる。

五奈良県御所市大字茅原。

一底本訓釈「博(ハ)広也」。二「得」は老子に由来する語。「一」は道の意。以下、道教的表現による文節がつけられる。三底本訓釈「底(ハ)禪」

茅原村の人なり。自性生れながら知りて博く学びて一を得たり。三玉を仰信ひて之れを以ちて業とす。毎に庶はくは、五色の雲に挂りて冲虚の外に飛び、仙の宮の賓と擲りて億載の庭に遊び、蕊蓋の苑に臥伏して養性の氣を吸嗽はむとねがふ。所以に晩年四十余歳を以ちて、また巖窟に居て葛を被松を餌ひ、清水の泉に沐みて欲界の垢を濯ぎ、孔雀の呪法を修習ひて證に奇異しき験術を得。鬼神を驅使ひて自在を得、諸の鬼神を唱して、催して曰はく「大倭国の金峯と葛木峯とに、椅を度して通はむ」といふ。是に神等みな愁ふ。藤原宮に宇御めたまひし天皇の世に、葛木峯の一語主大神託き護ちて曰はく「役優婆塞天皇を傾けむことを謀る」といふ。天皇勅して、使を遣りて捉らせたまふ。なほ験力に因りて、輒く捕られず。故に其の母を捉る。優婆塞、母を免れしめむが故に出で来りて捕らる。すなはち伊図の嶋に流す。時に身は海の上に浮び、走くこと陸を履くが如し。体は万丈に踞り、飛ぶこと翫ぶ鳳の如し。昼は皇の命に隨ひて嶋に居て行ひ、夜は駿河の富岬嶺に往きて修ふ。然うして庶はくは斧鉞の誅を有され天朝の辺に近かむことをねがひて、故に殺る劍の刃に伏ひて、富岬の表を上る。「斯の嶼に放たれて憂へ吟ふ間、三年に至る。是に慈の旨を垂れたまへ」とまうす。大宝元年歳の辛丑に次る

としの正月に、天朝の辺に近かしめられ、遂に仙に作りて天に飛ぶ。吾が聖朝の人道照法師、勅を奉り法を求めて大唐に往く。法師五百の虎の請を受け新羅に至る。其の山の中に有りて法花經を講く。時に虎衆の中に人有りて倭語を以ちて問を挙ぐ。法師「誰れぞ」と問へば「役優婆塞なり」と答ふ。法師我が国の聖人なりと思ひて、高座より下りて求むれども無し。彼の「一語主大神は役行者に呪縛せられ、今の世に至るまでに解脱かれず。其れ奇しき表を示すこと多数にして、繁きが故に略はくのみ。寔に知る、仏の法の験術の広く大なることを。歸り依まばかならず證を得む。

邪見にして乞食の沙弥の鉢を打破りて現に悪しき死の報を得る縁 第二十九

白髮部猪丸は、備中国少田郡の人なり。天年邪見にして、三宝を信はず。時に一の僧有り。来りて食を乞ふ。猪鷹乞ふ所を施さず、反りてまた逼し惱し、また其の鉢を破りて逐ひ去らしむ。然うして後に即きて他郷に往く。道中に風雨に遭ひ、暫間他の倉の下に寄り、覆りて圧ひ殺さる。誠に知る、現

可波久□」。底本訓釈「挂加々利天」。仙女。神仙界の女と人間界の男とが手に手をとる描写は、稻枝伝に拠つた万葉集・三・五・妹が手を取る、統浦島子伝記や古事談所引浦島子伝に「提携到蓬萊宮」。底本訓釈「携大川左波利」。六・億年。長生を得ることをいふ。七・底本訓釈「夢音伊反・花也」。神仙の居処とされる「蓬莱宮」。「宮」と関係がある。八・不老長生。初学記・道親部・應養・性得仙」。底本訓釈「吸々比」。氣に關して「吸嗽」という例に「吸嗽欲界一切修善善男子善女人等或童男童女福德精氣」(不空羼索神變真言經・二十)がある。九・底本訓釈「晚久仁仁」。三・フジの織維を原料としてつくつた衣服。一〇・列仙伝には、松実(窟屋)、松脂(飢生)、松葉(毛女)、などは食した仙人の説話がみえる。列仙伝「僊僊餌松」。底本訓釈「餌吞也」。一〇・三界(欲界、色界、無色界)のひとつ。仏教の宇宙觀に由来するが、道教でもいう。一〇・底本訓釈「灌須支」。天使役鬼神は、仏教よりもむしろ道教において説かれることが多い。一〇・底本訓釈「催毛与保之天」。一〇・金峯山。底本訓釈「催毛与保之天」。一〇・文武天皇。奈良県橿原市に藤原宮跡がある。三・雄略天皇は葛城山でこの神と出会つたことが、書紀・雄略天皇四年条、古事記下、にみえる。四・日本紀・二十五、所引の土佐國風土記では、土高賀茂大社の神は一言主尊。高賀茂氏は本末かかわりがあったのであろう。本説話では「鬼神のひとつ」。統紀・文武天皇三年条では「鬼神のひとつ」。統紀伊豆嶋。底本訓釈「太也須久」。三・富士山。底本訓釈「太也須久」。底本訓釈「太也須久」。底本訓釈「太也須久」。

「氏也」。氏の音はシ、ジ。漢字の「祇」は、音はチ、ヂ。底本訓釈「嶺大介」。義楚六帖・二十一「日本国」の条には、金峯山と富士山との二山をあけていふ。底本訓釈「并乎乃」。「祇」(万左加利)「誅罪也」。底本訓釈「有可久礼天」は、何らかの誤写を含んでいる。底本訓釈「刀齒(刀齒)か」。元・扶桑略記・大宝元年(七)条所引の本伝には、役優婆塞を殺そうとした勅使が優婆塞の祇めた刀に富慈明神の表文があらわれたことに驚き、縛に写して天皇に言上した、とある。本説話は簡略ながらも同様の展開をみせる。このあたりの文脈理解は中村宗彦説による。底本訓釈「嶼(嶋也)」。三・統紀・文武天皇三年五月二十四日条に「役君小角流于伊豆嶋」とみえる。文武天皇三年は六九九年。三・七〇一年。三・僧伽婆羅説の孔雀王呪經下に「有五神通、飛行自在」とある法を説く。三・上卷二十二條。本説話では、大宝元年(七)に役優婆塞が仙となつてのちに道照が渡唐したように読めるが、統紀によれば、白雉四年(六三三)入唐、文武天皇四年(七〇〇)歿。三・未詳。三・僧伽婆羅説の孔雀王呪經に付された結呪界法に「呪解解界、此中諸被繫縛鬼神、我今解界、聽汝隨意去」とみえる。

第二十九條 惡業についての現報説話。今昔物語集二十ノ二十六に書載。毛未詳。本説話以外に所伝をみない。亥年の生れか。六・岡山県小田郡、空岡市あたり。三・それどころか逆に。四・原文「加」(「加マタ」(名義抄)。四・「即オモムク」(名義抄)。三・伊勢物語・六に、雨に遭つて倉に宿る叙述がみえる。五・底本訓釈「寄宿也、隠也」。底本訓釈「庄於曾比」。